士族　成矢正景　二十三年二ヶ月

一、明治七年九月ヨリ明治八年十二月迄、高知病院ニ於テ医学修業。

一、同九年二月ヨリ同五月迄東京駿河台南甲賀町十七番地緒方惟準ニ随ヒ医学修業。

一、九年六月ヨリ本郷元町壱丁目壱番地、済生学舎ニ於テ医学修業罷在候也。

明治十三年二月九日　」

このように種々の学歴の人々が医術開業試験の受験のために済生学舎に学んでいた。

（日本医科大学）

61　野口英世の医術開業試験

石原理年

野口英世の伝記類は多く、その人物業績評価も多様であるが、基幹となる医術開業試験についてさえ、未だ解明されていない。

野口の受験した医術開業前期試験は、明治二九年四月二一日付、内務省告示第三九号による。中外医事新報は三九七号で「本年第二回東京医術開業学説試験及開業試験（十月分）学説日割左の通り定められたり」とし、前期日程を十月十二・三日（受験番号一―二四〇）、十四・五日（二四一―四七五）十六・七日（四七六―七一〇）と報じている。野口の前期試験合格証書は第六八号であるから、これより推定すると、受験日は十月十二・三日か十四・五日の何れかとなる。

後期試験は、内務省告示第三九号で「明治三十年第二回医術開業試験竝薬剤師試験挙行ノ地及期日左ノ通り相定ム。明治三十年五月六日。内務大臣　伯爵樺山資記。医術開業試験、東京府下東京市十月一日。京都府下京都市十一月八日。熊本県下熊本市十月十五日」と公告された。これに基づき定められた試験場、日程、試験問題を、中外医事新報四二二号（明治三十年十月二十日）で次の様に報じている。

本年第二回東京医術開業試験は、去る四日より永楽病院内なる試験所に於て挙行せられたり。その問題及日程左の如し（後期）十月四・五・六日、八・九・十日としている。東京試験場に於ける後期分成績は、受験者一二一九名（内実地出願者三〇〇名）の中、疾病事故等の欠席者九五名。中途欠席三九名。退場を命ぜられた者一名で、試験完了者一〇八四名の中、及第者二二四名（内実地出願者一三五名）、学説合格承認証交付者二二名である。野口の後期試験合格証が、十月受験、第一五四号であるから、十月後半分の受験となり、従って試験問題は次の通りとなる。

十月八日、外科学、㈠瘭疽の原因、症候、療法。㈡下気管切開術適応症術式及後治法。㈢膿潰性乳房炎の原因、症候、療法。薬科学、㈠安知必林の理化学的性状、生理作用、医治効用、用量及極量。㈡駆虫剤の名称、生理的作用、医治効果、各品の用量及二個の処方。九日、内科学、㈠腸管内寄生虫の名称及其簡単なる症候は如何。㈡赤痢病の症候、鑑別及療法。㈢肺気腫の症候、療法及気管枝喘息との鑑別。眼科学、㈠角膜全葡萄腫の定義及其続発症。㈡視神経乳頭陥没の種類及其診断法。十日、産科学、㈠妊娠の徴候。㈡足位回転術の適応及術式。

京都試験場の成績は、受験完了者一九一名中、合格者二一名。熊本試験場受験者一一六名中、合格五〇名であり、総受験完了者一三九一名中、合格者二九五名、合格率は四・七倍であるが、実地試験のみの受験者を除外すると、総受験者一〇〇七名中合格者一一二名となり、合格率は約九倍となる。

これに対し、奥村鶴吉『野口英世』は、「……後期試験の受験者八〇名中の合格者は僅に四人だけであった。立花為太郎（富山県士族）松田正道（長野県士族）小川保次郎（鳥取県士族）野口英世（福島県平民）。それが愈々公表された時、ここに医師の資格を得た四人は直ちにその記念撮影を

した……」としている。湯浅謹而『野口英世』もこれと殆んど同文であるが、松田正直を長崎県士族としている。筆者の閲読し得た野口伝は全てでないが、この記載に追従、右四名の氏名を列記しているものに、小村剛史、筑波常治『野口英世』、渡辺淳一『遠き落日』などがある。八〇名中四名合格とのみ記したものに、丹実『野口英世の生涯』、小泉丹、中山茂、プレセット『野口英世』等がある。後期試験合格のみを記したものに、東京歯科医学専門学校編『野口英世その生涯及業績』、エクスタイン、志賀潔、宮島幹之助、中井久夫、渡辺得治郎、高橋進等のものがあるが、これら著者の殆んどは伝記作家ではないが、著述が昭和八年奥村本刊行以前のものである。

受験者八〇名中合格者四名とした、奥村説の論拠が何処にあるのか、今日明らかにし得ないが、奥村本発行以来、これが野口伝の定本とされたため、以来野口伝類書の多くがこの誤りを追従している。更に、前記松田正直については、合格発表名簿に記載がされていない。八〇名中四名説は、合格発表直後の撮影とされている記念写真に係りがあると考えられるので、これを含め検討する。（京都大学）

62 最初期歯科X線診断学の文献的研究（その二）

―機器、フィルム、露出時間等について―

○塩津　二郎・森山　徳長

昨年第十九回本学術大会で、われわれはわが国でX線歯科診断を最初に紹介発表したのは、「湖柳生」こと野口英世であること、およびその原著についても報告した。

またわが国と諸外国で最初期の研究者たちが、苦心して歯科診断への道を模索した情況とPriorityについて概説した。

今回が独・英・米の初期研究者たちが、X線撮影装置の改良に取組んだ道筋をたどり、診断に活用できる程度の歯科X線像を得るための努力の軌跡を追求した結果を報告する。

今回はレントゲンの最初の発見からおよそ十五年の期間